
「嫌な事は出来るだけ見ないように」

マリオネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「嫌な事は出来るだけ見ないように」

【Nコード】

N0058BA

【作者名】

マリオネ

【あらすじ】

夜空と小鷹のSSです。

時系列等は特に気にせず、なんとなく楽しんでいただけたら幸いです。

登場人物の言葉づかい等が変でしたら、指摘していただけると幸いです。

おそらく2話で終わります。

1話

放課後から俺の一日は始まるといっても過言ではない。なぜなら俺には友達がいらないからで、そんな奴の学校生活なんて想像に容易いだろうが、アレだ。

朝、学校に来る。昼、飯を食う。夕方、何をしようか迷う（もちろん一人ですることに限る）という繰り返しになる。ほら、なんとなくキツイ様な気がすると思う。

ただ、俺には幸い、大切にしなければいけない妹がいる。たぶん、この妹がいなかったなら俺はきつと学校だけでなく、家でもテレビ位にしか喋る人間（？）がいなくなり、

学生生活と青春と言う掛け替えのない大事な時期をおそらくもつと陰鬱に過ごしていただろう。言っておくけど、寂しくないなんて思っただことはない。

い。ベッドに入れば明日の学校に

不安を覚え、朝起きたら休み時間と言う拷問Timeに陰鬱な気持ち覚える。そんな学校生活。青春。

なんていうか、そんな感じの学校生活を送っていたのだが、転入してからヒヨンなことで知り合った三日月夜空という美少女と隣人部という部活を立ち上げることになった（ほぼ無理やり）。

まあそこからなんやかんや色々ありながらも隣人部にも人が集まって、なんだか友達作りに必要な為の技術やら経験値を集めながら色々したとおもっ、いや、集めるために色々やった。

ロードトゥリアジューだ。みんなで色々やったものの、特に友達が増えたわけではなく、むしろクラスメートや学校の一般学生からはもっと嫌われた（近づき難くなった）と思う。たぶん

きっとそれは現実だと思う。

それらの詳しい出来事は野暮なので俺は語りたくない。むしろイタイ事ばかりで、これまでした事を言葉に直して傷になってしまった

ら嫌なのでいろいろ仕舞っておこうと思う。ふふふ心いたい。

「おい小鷹、気持ち悪い顔して変な顔をするな気持ち悪いぞ。また妄想か？まさか私と同じくエア友達を作って心で会話してたのか。寛大な私はその低俗な猿真似を許してやるから

取りあえずそのエア友達を話してみる。クオリティ如何によつては死んでもいいんだぞ」

「そんなんつくんねえよ！」

一人で考えていたら諸悪（？）の根源。三日月夜空が話しかけてきた。後、気持ち悪くはないんだぞ、夜空よ。え、そんな顔すんなよきもちわるくないよホント。

「…安心しろ。私も鬼ではない。エア友達ビギナーの貴様に高い技術を要求してるわけじゃない。ただ貴様の場合エア友達ではなく単なる妄想かもしれないからな。私が正してやる」

いや、悪鬼の類にしか思えないよ。あの幼馴染は強く成長したんだな。うん、すげーや。ていうかエア友達って妄想の類じゃなかったんだなこいつの中で。

「まあ良い。今日の私は気分がとても良いのだ。黙秘を許そう」

さあ崇めよとも言いたそうな顔をしている。教室でこの調子で喋るとは、おそらく今日はとても調子が良いのだろうが、その内容を聞くとおそらくこっちは落ち込んでしまっただろうから聞くのはよしとおこうと

思うんだけど、夜空は聞いてくれとばかりに顔をかがやかせている。聞かないけどな。

「何があつたんだ夜空。だろ、小鷹が言いたいことは。なあに、心が読めるわけじゃない、単純だなあって感心してたところだ気にするな」

「なんなんだよ！？……しかも思ってること違うしッ！！」

ものすごい笑顔でこんなことを言えるこいつは本当にすごいと思う。誰もが振り返るようなこの可愛い笑顔で違うこと言われたら破裂しそうになるんだろうな。でも違う言葉はきつと

出ないので（でも他の罵倒だろう、本人は罵倒とわかってるか知らんけど）その心配はしなくてもいいんだろうな。でもそういう心配もしてみたいな、なんて。

改めて良く夜空を見てみると本当に美少女だ。ほんとうに性格は神様が絶対悪戯したとおもう。悪ふざけだよ、神よ。

「改めて良く夜空を見てみると本当に美少女だ。」

「え、それ、あ、い?！」

しまった!口に出た!

「ああああああ!！そうだ夜空!そんな気分いいなんて珍しいじやん!何があつたんだ!？」

「……ぼそ……**が……ぼそぼそ……」

「え、なんだって」

なにかを呟きながら夜空は顔を真っ赤にしながら教室から出て行った。その後の放課後まで夜空は帰って来なかったが、正直助かったと思う。

「あ、今日部活休むのいうの忘れてた」

なんて他のことを考えてごまかすことにした。今日は金曜日なので月曜日まで夜空と顔を合わせることもないので、次ぎあうときにはお互い忘れてるだろう。

と言っわけ取りあえず理科当たりには今日は部活に行かないとメールを送っておき帰ることにした。

f r o m 理科

今日は理科も用事があるので休むつもりだったので、夜空先輩に転送しておきます

どんな用事かって?きつと先輩の頭の中で理科は舐られているのでしよう。もっと卑猥な想像してくれてもいいんだぜ。ハアハア……

『ありがとう』と送り返しておいた。

理科からの返信がよく解らないくらいハイテンションだったので取りあえず無視しておいた。

そんなわけで、家に帰って親父の知り合いであろう人から送られてきた品物を受け取った俺は、久々の部活のないふわふわとした時間を過ごそうかと思いきや、取りあえずコーヒーでもいれるかなあ、小鳩に豪華な夕食でも作ってやるかなあなんて考えていた時に、携帯がなった。

「ん？だれだ」

ポケットから取り出すと、ディスプレイには、三日月夜空と表示されていた。なんかあったのかな？

ピッ「どうゆうことだあああああああああ……！！！！！！！！！！」

「うわあ!!!」ブチっ

しまった、あまりの剣幕に驚いて切ってしまった。あ、また掛つてきた。

「なんできるのよお！小鷹のくせに生意気だぞ貴様ああああああ

あああああああ！！！！！！！！！！」
うお、なんか変身しようとしてるのかこいつ！？こわいぞすごいこ
わい。

「おちつけ夜空、こわいぞ」

「う、こわくなんかなぎい……ぐう……! !」

もうなんだろう。噤んで冷静になったのか落ち着いたのかもうそれ以上は奇声を上げる事はなかった。

「ううう……今日はなんで休んだんだ……」

「ああ、家に荷物が届く予定だったから」

「嘘だな。人見知りが激しい小鷹が、宅配人から荷物を受け取るまでのプロセスを完了できるはずがないだろう」

「じゃあ……！」

「むっ。そうだったのか。偉いぞ小鷹」

なんか褒められた。多分馬鹿にされているのだろうけど。

「もう用事は終わったのだらう。なら早くこい」

無茶な注文を……でもまだ時間的にも早いし良いかなって思うけど多少迷う。

「今から学校だと少しかかるぞ。なにかやるのか？」

「安心しろ」

なにがだろうか。

「今日の隣人部の部活は課外活動だ。お前の家の方角に出るつもりだから時間の心配はしなくていい。と言うことで決定だな。出来るだけ早く来い、場所は……」

なんか物凄い速さで決まっているけど

「ち、ちよつと待った」

「ん、なんか文句でもあるのか？」

「いや、色々いきなりすぎないか!？」

そういう運びになった理由とかもって教えてくれてもいいと思う

「来たらわかる」ブチッ

……切りやがったよあいつ。でも特にこれからの用事もないし、取りあえず準備でもするか。

「来たか。」

集合場所に着くと、すでに夜空が待っていた。

「悪いな、待たせちまったか？」

夜空の格好は制服ではなく、普段着にしている飾り気のない黒いジヤージでもなく、夜空の言うボーイッシュな格好シャツとホットパンツだった。

「あれ、お前制服はどうしたんだ？　というか皆は？」

皆も一度着替えに帰ったのだろうか？

「いないぞ」

は？

「その心は」

「全員用事だ」

「あー」

確かに理科は休みだったがああ幸村が俺に連絡もなく休むだろうか？　あいつそう言うところが真面目なはずだが。

「小鷹と私しか居ないが隣人部を休みにする事もないだろう。しかし二人であの部室と言うのも寂しかろう。それに友達の友達は友達ではないと言う言葉通りやはり遊びに行くという行為は二人で行うべきだと思ったのだ。わかったか。なら行くぞ」

こいつがそう確かにそうなのだが。

というか本質的な質問には答えてもらっていないような気がする。まあいいけど。

「まったく……」

先を歩く夜空の耳が赤くなっているような気がする。

まさか！？隣人部を揺るがすような問題があつて俺に相談を求めたか！こいつがそういう事を俺に相談しようとするとは……。相
当な事なんだろうなあ多分。

「ところで小鷹、どこか行く当てはあるか？」

問題なさそうだ。というか何処行くかも決めてないんだこいつ。

「二人で遊ぶ。どこか喫茶店とか入るとかいいいんじゃないか？」

「確かによくスターバックスやらなんやらでコーヒー頼むと言うのは聞くな。」

といつて適当な喫茶店に入り、とりあえず定番っぽいブレンドコーヒーを二人で頼んでみた。

二人用のテーブルに座り、コーヒーを飲んでみる。そんなにおいしいはない。

「……………しまったあああああああああああああああ
あ……………」

「うわあ！！！」

夜空が急に声を出すもんだからコーヒーをこぼしてしまった。

「な、なんだってんだ!？」

「ね、猫力フエ……」

「はあ」

猫力フェがどうだって言うんだろう。夜空が猫好きなのは結構意外だったし、また行きたいとも言っていたけど。

「こんな評価のしにくいよく解らんコーヒーなんか飲まずに猫力フエ行けばよかった……。くそ、忘れていた訳では無かったけどなぜ思い出せなかったんだ。」

あそこだったら多少味の誤魔化しがあるうとも猫の補正が……」

よっぽど猫力フェにご執着しているらしい。というかこいつさり気無く此処のコーヒーの事を馬鹿にした後猫力フェも馬鹿にしたぞ。

あ、猫が主体だから別にいいんだ。

「はあ、まあ良い。良くは無いがな。しかし此処のコーヒーは良いところが一つもないな。何を売りにしているのか解らん、クソ。意地を見せる意地を」

「俺はお前が何を言っているかわからない」

「解らないだと？はっ。歌だってそうだろう。別に曲の良し悪しなんかよりも、歌ってる奴がカッコいいだの可愛いだので曲の良さが変わるんだろう？」

「それもの凄い失礼だよ！というか質問にも答えてねえ！？」

「名曲はクソだと言っておこう」

「あやまれよ！本当の名曲たちにあやまれよ！」

こいつ悔しさのあまり色々なものに当たりはじめやがった。必死にツツコミいれたものの「うわ、なんだこいつ」見たいな目で見てやる。

「要するに、猫力フェに行く選択肢を出せなかった自分への怒りは他にぶつけようって事だろ」

「私は悪くない」

あ、そっぽ向き始めた。

「そう言えば音楽と言えばだな。最近の映画でもアニメでもリア充共はバンドをやるのが一種のステータスらしいぞ」

たしかにギターケース何かを担いで気分よさそうに歩く学生をよく見るようになったが。というか話題の振りおかしくない？え、音楽やる方向でまとめられる奴なの？無理だろ。

「だからギターケースに荷物を入れて学校にきたらそれだけで友達が出来そうじゃないか」

よかった、やらない事前前提で話が進みそうだ。

「でもケースの中から筆箱でてきたらなんか嫌じゃないか？」

「譜面に何か書く為に書くものは必要だろう。馬鹿だなあ小鷹は」

なんで馬鹿にされたの？いいけど、別にいいけど。

「でもギターを買う気はないんだろ？ケースだけ買ったとして、教科書と筆箱しか入れてなかったらケースがフニャフニャになるんじゃないか？」

「綿でも入れておけばいいだろう。軽いし。」

「もうホント最低だな」

あの男らしかった幼馴染はこうなったんだなあ……。あれ涙が。

「だいたい音楽やってる奴なんて頭がパーなDQNが多く見られているだろう。その効果で私の近寄りがたい雰囲気もギターケースでなんと50%は抑えられる計算だ。あと巨乳は馬鹿でエロい」

確かに、俺もギターケースを持ち歩けば、このくすんだ髪色もちよつとロックやってるからワザと崩しましたみたいな事になるかもしれない。「ロックだからな」っていい言葉に思えてきた。

「言ってることはなんとなく解った。確かにいい考えだとおもっていうか最後星菜の悪口だろ絶対。」

「それに、音楽やってる奴は馬鹿だから同類の音楽やってる奴に対して大した警戒心も持たないだろう。」

おお！夜空の案がなんだかよく思えてきた。案だけ。

「それでは音楽店にいくぞ！」

「おう！」

そう言つて俺たちは意気揚々と近くのモールの音楽店に行った。

結果からいって玉砕した。

店に着くまでの道のりで「二人でケースを持ったら2ピースというオシャレな響きでなお一層良いんじゃないか？」などと甘い話を話していたのだが、人ごみで夜空が人酔いをして

しまい、取りあえず店に着いたものの、どのケースが良いか等と話していた時に店員が「ギターの形やらうんたらかんたら……」と聞かれ、「あ、自分の持つてるギターの

形の名前とかわからないんですー」とか言っでしどろもどろになっていた所、親切（迷惑）にもギター置き場に連れて行ってくれた後「このギターは良いですよー、試に弾いてみ

ますか？」などと、ほんとーに親切にしてくれたが、ギターなんて弾かないし、知らない人と喋るのは俺にとって難しいため、黙って「ああ、はい」とそっけない事を言ったら、

店員さんが「俺のせいで気を悪くしたんじゃないか」と思ったんだろつ、必死に楽しませよう仲良くしようと頑張っている姿がとても辛かった。その上、その店員が馴れ馴れしいと夜空に

判断されたらしく、時たま聞こえる舌打ちと不機嫌オーラが俺を刺した。そして店員の隙を見て逃げるように店をとびだした。

あれ、この計画って夜空発案だよな。なんで俺が冷や汗だらだらなんだろつ。

「帰る……」

夜空は背を向けて歩きだし、一度振り向き「気持ちわるい……」と言いきり残し去って行った。

「……………」

せめてあの気持ち悪いが俺に対して言われたことじゃない事を祈る。

家に帰ったら夜空からメールが入っていた。

f r o m 夜空

今日は凄いたのしかったよ！ありがとう。

小鷹ものすごい話し上手だったから超盛り上がったよ！

今日の私変じゃなかったかな？小鷹の隣にいても恥ずかしくならな
いよう私も頑張るね！

また二人で何処か行こうね。

とりあえず無視しました。

「呪いの類なのかなあははあはは」

次の日「テンプレでした。ごめんなさい。お詫びがしたいから今日
会おう」とメールが入っていた。
取りあえず用意して行くことにした。

「昨日は悪かったな……」

待ち合わせ場所に行くと、夜空の第一声はそれだった。

「いや、別によく解らなかったただだから怒ってもないぞ」

「だってメール返してくれなかった」

ちよつと俯くように呟いた。上目使いでチラチラみられるのはなんだか悪い気はしない。可愛いし。

「つーか、あのメールを返せないだろ。て言うかあのメールの真意をしりたい。」

「ななめ読みしてみる」

「あ？」

メールをななめに読み返してみる

今鷹の人

「え、なにこれ？」

「お疲れ。よし、今日こそ猫力フェだ！」

「反省の色なし!？」

いや、反省することもないのか？まあもういいや。面倒だし。

心なしか夜空の顔が赤い気もするが、そんなに猫力フェに行きたかったのかこいつ。

「いらつしやいませー」

「きゃー!……可愛いなあ」

夜空は猫力フェに着くなり、出迎えに来た猫に飛びついていった。時間制の所なので、とりあえず1時間と店員に告げて席に着く。猫カフェの面白いところというか、テーブル席のほかにコタツ席と言うのがあって、コタツに入りながら

猫とたわむれつつお茶を楽しむ席があり、とりあえず面白そうだったからそこに座る。当たり前だが掘りごたつではなかった。とりあ

えず店員にコーヒーを頼み、やって来た

コーヒーを飲みながら、小鷹ミシラン星3つなんて考えていた。
ついでに小鷹ミシランの最高得点は星5つだ。

夜空はコタツに入るなり、近くにあった猫のおもちゃ箱という箱の中から猫じゃらしを拝借して猫をおびき寄せていた。

こうやって猫と遊んでるところだけ見れば、こいつって凄い可愛いんだけだなあ……。

「そおれそおれ……やあん……やっぱり猫は可愛いなあ、ここに住みたいなあ」

「そういう部分をもつと見せれば凄い可愛いんだけどなあ」

そう言くと夜空は猫じゃらしを動かす手を止めてカクカクした動きでこちらを向いてきた。そうするとおもむろに俺に向けて猫じゃらしを向け「にやあ……」とささやいてきた。

「ぐばふっ!!ぐは、ぐはっ!!!!」

汚え!!汚いよこいつ!!思わず口に含んだコーヒーをだらだらと零してしまあああああああ!!!!!!!!ああああああああああ!!!!!!

「こんな感じかな？」

「ぐううううう……」

そんな顔を真つ赤にして無垢な顔して聞くのは反則だと思う。文句なしなのだが、なんかそのまま言うのは何か悔しい。

「や、やるじゃん……」

なんとか言葉を絞り出したが、なんて情けないセリフなんだろう。

「……………」

お互いにそれ以上何も話せなくなってしまい、空気ごと固まってしまった。

居たたまれない様な時間に先に負けたのは夜空だった。

「小鷹は……こういう私のがいいのか？……可愛いって思うか？」

「……残念とは思わなかった」

自分でもなんて情けないんだろうと思う。いつもこう女として見えないからなのか、たまにするこいつの狙った様な仕草は毎回ドキッとさせられる。

「なんだろう、いつも残念に思ってたからギャップに萌えるというか

……」

「む、残念とはなんだ。小鷹のくせに偉そうだ……萌えるんだ……ふん……」

「ああ、とてもいいと思う」

「じゃ、じゃあ！また見たいと思うか！？」

「……ああ、また見たいとおもう」

もうオウム返ししか出来ない。なんだろうか、すごい恥ずかしいけどウソも言えなくなっていたら、夜空はテーブルに少し身をのりだし

「そっか……じゃあ！」

とんでもない事を言ってきた

「こういう事お前だけにしてやるから隣に居させる！」

「か……！」

「考えさせてください!!!!」

1 話（後書き）

ありがとうございました。

この話は少しでも長くなりそうです。

私は夜空と理科が好きなので、次回はおそらく理科のSSを書くと思います。

2話

「こういう事お前だけにしてやるから隣に居させる！」

夜空に言われたこの一言は俺をフリーズさせるには十分すぎて。もう何がなんだかよく解らなかった俺は色々な思いを馳せた後

「考えさせてください!!!」

と、まとまらないままに沈黙に負けてこんな事を言ってしまった。

「んな!？」

「考えさせてください!!!」

自分の顔が真っ赤なのが自覚できる。言っただけの夜空もそうなのだが、思いのたけをぶちまけた分だけ気持ちに余裕があるのか何か言いたそうだったが、こっちはもう

どうしたらいいのか全く分からなくて同じことを叫んでいた。

「貴様!私がどんなに恥ずかしい事を言っただけか理解できているのか!?!」

「だ、だって…」

とりあえず逃げたくなって時計を見る。猫カフェの利用時間が後5分と迫っていた。ナイスタイミングで店員さんが「お時間ですが、ご延長なされますか?」と聞いてきた。正直もの凄く助かります!

「あ、清さ「延長1時間!!」……」

「あ、ありがとうございます」

といって笑顔で去っていく店員さん。夜空の大声でちょっとビビッていた。可愛そうに。

「今日は逃がさんぞ!」

しかもなんだかノリノリになって行く夜空。もう破れかぶれになりつつあるのだろう。

「ちよつと待てよ!落ち着けよ!」

「落ち着けるか!私は…私は、まえまえからそうなれば良いと思っ

てた。もうタイミングを逃すのも小鷹に逃げられるのもごめんだと思っただ」

「……………」

頭の整理が追いつかないのもある。だけど、こいつはそんな事を考えてたのかとんだか居たたまれない様な気持ちになっていく。

「で」

「でって言われても……」

「どうだ」

「ま、待ってくれ。そんないきなり答えなんか出せるわけないだろ。まだなんか……現実感ない。と言うか整理もできてない」

「なら……待ってる」

そう言っただけは俺に考えると云わんばかりに黙った。睨みながら「なんだろ、言ってることはその……要は……付き合ってくれて事であつてんだよな？」

言ってるのも恥ずかしいが、もしもなにかの間違いで俺が勝手にこういう風に思い込んでるだけかもしれない。しかし夜空は恥ずかしそうに下を向くと「そうだ」といつてまた黙った。

時間をくれると言うんだから考えてみる。

というかこいつは何時何処でこんな事を思っようになったんだろう。俺の事をその……好きだなんて、好きなのかあ、確にかわいいし一緒に連れ立ったら自慢にもなるよなあ。

あ、こいつ俺の彼女なんだぜって良いよなあ。あ、でもこいつ相手に絶対舌打ちする。ダメだな。

なんて貰った時間もあまり有効に活用できないまま5分10分と考えていると『ソラ』の事を思い出した。

小学生の時の親友。裏切られつつ裏切りつつの関係で終わってしまった親友。でもお互いそれは勘違いだったと言うことでもう一応の終わりを見たはず。

というか目の前のこいつが『終わらせた』はずだった。

ソラの人生で唯一の友達。それに終わりを着けたのは夜空のはずだ。

「友達だった」と過去形にした夜空。俺はあの時に、ソラとの友情はもう無いものだと言った。

戻りたいと思ったが、ソラの事を忘れてた俺がタカを覚えていた夜空に出来ることは受け入れる事だけ。でも、それでいいと思ってた。夜空がタカはもういないと認めた上で

俺と関わりを持つとするのは、タカが居なくなった自分への慰めだと思っていたし、俺は昔の事で夜空との関係がなくなるのは悲しく思えたから関係は続けられたと思ってる。

それに自己満足だが、俺は過去に戻ってソラ謝れた。ソラに対してこの10年間を謝れた。薄情にも謝れたんだ。気は楽になったし、夜空にもなにも後ろめたさは無くなった。

でも夜空は？

あの時を引きずってないのだろうか？いや、引きずっている。だから昔の事を蔑ろにされると激怒するのだろうか。そのことを夜空とちやんと話さなきゃと思った。

「なあ」

「なんだ」

冷めてしまったコーヒーをすすする。

「夜空は10年前の事をお前は どう思ってるんだ？」

夜空の顔色が少し変わった。少し昔を懐かしむような、それでいて悲しいような。でもやっぱり怒ってるような優しい表情。

「楽しかったよ。でも、やっぱり最後の日の事は理由がわかってても綺麗にはできなそうだよ」

「やっぱり恨んでるのか？」

「そんな事はない！」

少し声を張ったあと俺を慰めるように

「理由はもう解ってるからな。あの日に私がもう少し勇気があったらこんな事にはならなかっただろう。タイミングが悪かったと言った『それ』がすべてだと思う。」

それに：大事なことを言えなかったのはお互い様だ」

「そっか…」

「でもお前はいなくなっただろう。その先はお互い孤独だったんだ、10年間」

「転校前は友達いたけどな」

「私は居なかった！！！」

確かにソラ位信頼し合えるような友達は居なかったけど、ちょっとした軽口のもりで言ってみたら夜空の琴線に触れてしまったらしい。

「あの日から私は唯一の友達を失ったんだ！裏切られたって思ってた。当然だし私から逃げたとも思った。引越してはしょうがないとか色々考えたけど子供の頃だったから私から離れようと

しただけなんだなとしか考えなかった。誰もいなくて辛いときに楽しかったあの頃を思い出して結局最後は悲しい思い出でて……」

夜空の目じりには少し涙みたいなのが溜まっていた。

「……思った以上に残念だったんだな」

「うつさい。まあ小鷹が転校して来てお前も同じような状況だったから胸はスツとしたがな。」

そう言ってコーヒーを飲む夜空。ていうかスツとするって。

「ただ一番ムカつくのは私があの日公園に行っていれば別にこんな辛い事も無かったからだろうな。お前もこんな気持ちを味わう事は無かったんだ。本当に申し訳ないって思ってるんだ」

だからこれ以上あのこと責めないでくれって言ってるようにも聞こえた。

「全部私の所為だとも思う。ただやっぱり日の事は頭で納得しようとしても10年も引きずってしまったからな。多分変えられない」

「お互いがあだ名で呼び合うのが嫌なのはなんでだ」

「タイミングを逃した」

「はあ…」

逃したってなんの。でもなんとなくあの時の事をお互い自分の所

為だっと思ってたって事が嬉しかった。相手を恨んだ事を差し引いても。

「タイミングを逃した」

「なんのだ」

「転校してきた時に小鷹がすぐ私に気付いてくれなかったという」

「また堂々巡りな……」

「だろう。でもアレだけ恨んでも小鷹の正体に気が付いたときに嬉しかったからな。不思議な気持ちだった。別にそれが恋心に発展したんだからお前の事は小鷹だ。」

「いや、わからないぞ。恋心うんぬんはさて置きあだ名で呼べない訳って結局なんだろう。」

「いいんだよ。別に、お前がタ力で小鷹だからな。どっちも良いんだよ。というか急に換えられても気持ち悪い」

「なら良いんだけど」

「だろ」

「そうらしい。昔の事を忘れる気もないし前に成長したくないのとか色々まざってこうなったらしい。でもこいつあだ名大事にしてたよな。」

「あだ名は友達同士で呼ぶものって言ってたよな。そんなに大事なラどうでも良いとか言わくないか、普通」

「大事なものじゃないと言ったつもりは無い。ただお前とそう呼び合うようになったら…意識しちゃうかなって…。その頃にはず、好きだったんだ」

「ああ、そういう感じだったんだ」

「お互い意識してるみたいで恥ずかしかったと」

「っ！……うん」

「言ってるこつちも恥ずかしいけど…。なんかもの凄い嬉しい。こんな気持ちをなんて言えばいいんだろかわからないけど。感謝というか。」

「10年ってすごい長い時間だったな……」

こう思ってそのまま口にした。夜空も「そうだな」と言って二人で笑った。冷めたコーヒーを飲みながら。

変な関係だともう。でも嫌な関係じゃなくて良かったと思うし、無言で二人でいる時間が心地よく感じる。あの頃のしがらみが消えたような気がする。夜空もそうだと良いなっと思っ。

「ソラと友達でよかったよ」

「私もタカと友達でよかった」

そう言っってもう一度笑っ。

「で、答えを聞かせてもらおうか。貴様途中で逃げられるとか考えなかったか？」

逃げようとはしてない。うやむやにしようとしただけだ。

「あー…すぐに答えは出せない」

「逃げる気か」

「そんなジト目で睨むな」

当たり前だがムっとした顔で居る。

「こんな事急に決めるっ言うほうが無理だっ。やっぱり昔の事もあるし…すぐには決められない」

「そうか…」

「お前の事は可愛いと思うし、俺だけの物にしたいっって気持ちもあるけど。それで良いのかっって思う部分もあるし」

ちよっとな夜空が嬉しそうな顔をする。でも俺は、きっ。

「俺じゃ決められないよ」

とまた情けない事を言って夜空をガッカリさせてしまっのであっ。

「はあ…そんな事だとは思っってたけど…」

「す、すまん」

そんなこんなで猫カフェを出ることにした。夜空には本当に申し訳

ないがもうどうしようもないと思う。ていつか罵られても仕方ないと思う。

「ふん、小鷹のヘタレさを思えばこうなることも考えてたからな…

…ほんと…」

「すまん」

もうそれしか言えない。

「まあ良い。しょうがない事だからな。…でも小鷹もタイミングを逃すなよ」

そう言つてニツと笑う夜空。

「ああ…」

「俺じゃ決められないと小鷹は言つたな」

ん、と思い小鷹をみると笑顔がちよつと悪戯っぽい物に変わつていたのを俺は見逃さなかった。

「じゃあ少しの間は私が決めてやろう」

そう言つて俺の手を引く張った。その顔があまりにも楽しそうだったから少し見とれてしまった。俺は夜空のこういう所は目が離せないと実感させられていくんだなつて思い出したら

止まらなくなりそうだった。でもそれも良いかなつて思つてしまった。

ただその後はそんなに長くなかった。夜空がいきなり人良いしだしで、帰りたいとぶつぶつ言い始めたのだ。

「か、かえるか？」

「やだ…」

と言いつつも顔面蒼白な夜空を見ると大丈夫だとは思えない。あ、大丈夫とは言つてないか。ついでに笑顔はすでに霧散している。

「どうしてこんななのよお……」

毎回の事だが隣人部のが頑張って何かをするときは大概に残念な結果に終わる。そう、部を離れた所で皆が残念なのでこうなってもしょうがないんだろうなあ……

「残念どうしつてことで落ち着けよ」

「あ”あ”！？」

慰めたつもりが逆効果だったらしく、睨まれてしまった。

「いや、でも限界だろ」

「……」

「やばくなる前に帰ろうぜ」

「…もうやばい。ついでに言つと握ってる手は今は気持ち悪さを誤魔化そうとしてるだけだ」

そついう事は言わないでほしかった。というか人ごみに入ってから段階式の圧力ソックスみたいに強くなつていったので気付いていたけど。

「どっか人気がないところに連れてけ…」

「わ、解った」

とりあえず夜空の手を引いて公園に行くことにした。

取りあえず公園のベンチに夜空を座らせてから「ちょっと待ってる」と言つて、急いで飲み物を買に行くことにした。

「水でいいよな…」

公園を見ると夜空が気だるそうにこちらを見てる。でも俺が気になったのは、子供の姿が一人もない事だった。日曜日だというのに。

俺らが小学生のころも大概空いてはいたが、よく

見ると公園のブランコや滑り台ももう役所から見捨てられたのか、整備も特になく、後はただ取り壊されるのを待っているような気がした。そんな事を思いながら、夜空のもとに行き水を渡した。

「ありがとう」

「気にするなよ」

と言って寂しげな公園に目をやる。俺と夜空の思い出の公園じゃないが、ジャングルジムやブランコ、砂場などの遊具はあるものの、あの頃感じた輝かしさが無い。

「寂しいな小鷹」

「どうした？」

「ふっ」つと一呼吸置いた後

「私といるときに暗い顔をするな」

「…お前キャラ変わりすぎだろ」

夜空の顔がボツと赤くなる。

「もう私は退路がないんだよ……ううう、気持ち悪い。で、何考えてたんだ」

そういつて俯く夜空、俯いたら気持ち悪くなると思うんだが。

「公園も変わったなって」

「そんなことか」

そんなことって。

「別に当たり前だろう。大人になったら外で遊ばないでゲームばかりするだろ、子供だって目の前にゲームあつたら外でなんか遊ばない」

「でもなんか、寂しくないか？良く二人で遊んでたしな」

「またそれか。昔の事はもうやめよう。時間の無駄だしこれからの事を考えたほうが得だし私があんな事を言つた以上もう戻れない事を自覚しろ。……あとその事は謝らないぞ」

自分勝手にも聞こえなくはないけど……。でもやっぱり寂しいなとは

思う。

「…すまん」

「うん、少し嬉しいから許す」

「そんな事っていたり嬉しいって言ったりなんなんだよ」

夜空は俯きながらこちらを覗いてきた。

「昔の事は私にとっても大事だ。だからお前も大事にしてる発言はともうれしい。でも他人がどの公園で遊ぼうが私たちには関係ないし、私は居なくなればいいとも思ってる」

「なんでだ？」

「そしたらなんか特別な感じるだろう。老人みたいな発言だが」
「そんなくさいセリフを吐いたのちにまた俯いた。夜空の言葉は少し強欲というか独りよがりと言つか、そんな感じもしたけど、結局の所俺との過去が良かったで終わった。

それと、戻れない事を自覚しろと言った夜空の一言はきつかった。
もつと生ぬるい所でグダグダとなにか柔らかい空気に守られていた方が絶対に良かった。夜空に告白されたのは衝撃だったけど、正直放り出されたような気がした。

「小鷹…、迷惑だったか？」

「ん、なにがだ？」

何かなんかは解ってるけどあいつの口から聞きたいって言うのもあった。

「私たちはもう戻れないし、部室も…」

うん。皆の雰囲気は壊れるって思う。

「後、この告白断ったら私は小鷹と上手く一緒にいれなくなる…」

「うん、部室から居なくなるべきはどっちになるかかもな」

「私はそれを知ってて告白した。断りにくいのも知ってた」

頭の回るこいつの事だからその位は考えてたんだろうな。

「YesかNoのどっちでも戻れない。だから小鷹は一番なにかが変わらなさそうな答えない選択肢を選び続けるだろうとも思ってる。でもそれだと私は…嫌だ」

「うん…」

「でも小鷹はどうしたらいいかわからないって言ったよな。……………」
「だからこうする」

「えっ？」

まだ気持ち悪いのかダラリとしたまま立ち上がり、俺の襟をつかんで引き寄せるとそのまま唇を重ねてきた。

ビックリすぎてまた頭がパンクしそうになったが、夜空の目をつぶった顔のドアップと唇の柔らかさとか温もりとか…。あ、キスが気持ち良いのは一番顔で敏感な部分だかららしい、

後パーソナルエリアに入ってくるとか何とか…。正直自分が何を考えていたとかそんな事より状況とかなんか凄くもうよく解らない。小鷹よく解らない。

長いようなどんだけか数えてないけど多分5秒位だと思う。夜空がそのまま唇を離れておでこをくつつけてきた。

「判断材料だ」

恥ずかしそうに、でも妖艶な…。俺にだけにしか見せない夜空なのかもしれない。夜空は自分の唇を少し舐めた。夜空も緊張で唇が渴いてたからかもしれないと少し思ったけど違った。

「私は小鷹の味を忘れないからお前も忘れないで欲しい」

そういつて夜空は手を放した。

「望めばいつでもさせてやる…。だから少しでも名残惜しいと思つてほしいな…」

卑怯だ。忘れられる訳もないし…。出来ればもう一度したいとおもう。

でも、もう一回をねだったら…。そういう事だ。

「夜空…」

顔は合せなかった。あいつの顔は見えないが多分あいつもこっちを見てないと思う

「私は初めてだったぞ！こんな所で恋人でも無い奴に対して無理やり唇を奪ったのが…私のファーストキスだ…。最低だな…でも、ビッチみたいな奴らとは一緒にしないでほしい」

なんだか饒舌な夜空の言葉を聞くと緊張とか羞恥とか自分の守ったものを捨てたのとかが色々頭を過った。

「これでお前からちよつと昔を奪った代わりに少しでもなってくれればいいな…ダメか？」

「ご、ごちそうさまでした」

俺はまたパニックになって訳の分からない言葉を喋っていた。少し自分が嫌になった。でももう頭が回せる自身もなくなつて、ただただ……夜空と一緒に居たいなっと思ってた。

別になにかやましい気持ちとかキスしたいなとかじゃなくなつて昔の事でもどうでも良い事でもなんでも夜空と話してみたくなった。正直なところ、もう部活とかなんか色々な事が

夜空一色になっている。キスされた位でこうなってしまう自分は情けないと思うがこうなったらもうしょうがないなっと思ってた。

「ど、どうだった。私のキ、キスは」

「よ、良かったです。うん」

「そうか、それはよかったな…あはは。…もう一回したいと思うか？」

「それは凄く思う…」

「良かった…。私もそうだぞ！」

そういつて顔をほころばせる。望んだらできるって凄く条件だなしかし。もう一回夜空と…こう…。やめよう公園だ。

「まあ良かったな！公園でまた良い思い出が増えたじゃないか！」
もしかしたら嫌な思い出になるかもしれないけど…。なんて失礼な事を少し考えてしまった。

「帰るか」

「うん」

バス停に向かうときに夜空は俺の袖をつかんで歩いていた。小動物

みたいにそろそろ俺の袖をつかむ夜空は何とも言えない可愛さで、俺はそれを振り払うなんて考えられなかった。

特に会話らしい会話もなかったのだが居心地は悪くなくて、バスに乗ってから家に着くまで夜空をチラ見した時に目が合うとなんだか顔がにやけてしまう。

そんな事をしてたらもうすぐ家の駅についてしまっんだなって思うとだんだん名残惜しくなっていた。

「なあ小鷹」

言葉に出したのは夜空だった

「もう少し一緒にいさせてほしい」

最後のほうはもう消え入りそうだった。俺はうなずいて夜空と一緒に駅を降りた。

2 話（後書き）

前回分をだいぶ追加させていただきました。
たぶん次でおわります

ありがとうございました。

3 話

バスから降りた俺らは特に行く当てなんて無かったし、バス停回りに特に入る場所もないしどうしようかと迷っていたので「取りあえず散歩するか」と言つて、夜空も「それでよい」と言つてぶらぶらする事にした。

「夜空」

「なんだ？」

「んー、なんだ。そうだなあ……」

「特に話題が無いなら黙っている。その方が自然だ。それとも小鷹は会話が無いのは気まずいか？前にも結構あつたと思うんだが気まずかつたのか？」

「いや別に何時も気まずかつた訳じゃないけどさ。そういうお前はどうかだったんだ？」

何時もは気まずいって思わなかったのは多分夜空の事をあんまり意識しないで居れたって言うのが大きいからであつて、やっぱり色々した後だと意識せざるを得なかった。

でも気まずいと言うよりは恥ずかしいとか……あ、これも気まずいっていいのか。

「トモちゃんと話してるのを初めて見られたときは気まずかつた」「懐かしいなそれ」

そういえば夜空と話すようになったのもあれからだつた。

「その後は二人で部屋で居るときは私は本を読んでいたからな。お前の事を気にする事も無かつたから気まずくなかなかつたぞ」

そついつて胸を張り得意げな顔をする夜空。確かにそうだった気がする……

「二人で帰るつても無かつたしなあ……」

「二人になつたら小鷹が先に帰つてたからだろう」

そつでした。なんにしても夜空は今そんな気まずさは感じていない

ようだった。

「小鷹が気まずいと言つのは意識してるからなのか？この私を」

「……そりゃそうだろ」

あんだけされりや気にしないって事にするのは無理だ。

「そうか、じゃあ手を繋ぐぞ」

「なんで!？」

そうかつて絶対おかしい!と思う前に手を握ってきた。振り払う訳にもいかないのになんかちよつとモヤモヤしながら受け入れた。

「ふふふ、お前がしたいと思った事はお前からは出来ないもんなあ……今は!そしてそれをされたら拒めないもんなあ。悪くないぞ小鷹。」

お前から望めば私は受け入れるのをお前は

知っているのにそれはお前ができない。くふふ……案外たのしいなあおい」

「ぐっ……」

やつぱこいつ性格悪い!!

「悔しそうなふりして本当は私からそういう事して欲しいんじゃないか?私からする分にはお前はノーリスクだしな。もしかして私が決めてやるうって言った時から少し期待してたんじゃないか?

キスした時も頭のなかじゃ『夜空もう一回してくれないかな』なんて考えてたのかもしれない。おお、なんて事だ」

「そんな事はないぞ……」

「ほおう、じゃあキスしたりしたい時は自分から言えるのか?いやあ無理だろうなあ小鷹には。」

なんか凄い苛められてるけどなんで!?

「なんでそんな事言えるんだお前は?」

「そう思つて無いなら小鷹から私の手を握り返す事は無いだろう。」

今私はお前から握ってくる手に添えているだけだからな。嬉しいぞ

小鷹。」

「あっ」

ホントだ……でもこれは

「小鷹は『本当はその気だけど俺からは踏み出せないから夜空が色々してくれないかな』って思ってくれてるのだろう？安心しろ。お前の考えていることは単純だからなあ。

本当はお前がしたい事だがしょうがないから私がやりたい事にしてから色々やってやろう。小鷹はヘタレだからなあ…しょうがないから気にするな。」

「俺はヘタレじゃない!!」

そこまで黙っていたがさすがに黙っていられなくなった。

「ほう、じゃあお前は自分から私がやりたい事をできるんだな？」

「あたりまえだ!!……あ」

え、なんか話がスゲ変わってる？私がしたい事？あれ？

「ふふふ……言質を取ったぞ小鷹」

「しまった!？言葉攻めはこの為か!？」

もの凄い苛めっ子の顔してやがる。顔真っ赤だけど。

「ん、なんのことだ? いやー何をさせようか…なあ小鷹」

「わかったよ…一個だけだぞ」

「まあ予想はつくだろう? キスしろ」

だよなあ……はあ、口元が緩むのがわかる。悔しいけどこんな可愛い奴からキスしろって凄く嬉しくない。

「ほら早くしろ。あ、唇を離すときは私のタイミングだからな」

そういつて目を閉じて少し上を向く。え、ここで? なんか凄い色々混じりこんだ笑顔で待たれてる。

「ちょ、ちよつとまった!」

「あ? やっぱりヘタレです私はって事か? 私をその気にさせて置いてそういう事ができるって言うのか?」

「いや、待ってくれ。せめて人がいないところでさせてくれ……」

そう、夢中だったけどここは人が通る往来で周りに人がいない訳じやなかった。夜空もそれに気が付いたのか「あっ」と言って目をそらした。

「そうだ! 家でいいか!？」

「っ！？いいぞ！！」

俺の家の近くのバス停だったからここから5分もかからないし、小鳩はいるけど俺の部屋なら見られる心配もないし丁度よかった。

「じゃ行こう」

「うん……」

なぜだか夜空の顔は真っ赤で繋いでる手を力いっぱい握りしめていた。結構痛かった。

はっ！？これ墓穴じゃないのか！？

3話（後書き）

色々この話は長くなりそうになってきました。
できるだけ早く終わらせられるよう努力します

4話

母さんが見てたらどうしよう。総回診の様なあの足音が僕の鼓動を速くする。という曲が頭をよぎった、正直その気分だ。男子高生が一人で耽っている時のドアの外から聞こえる物音足音こんにちわ。僕の心臓は拝啓母さんよろしく速い。ゾクゾクするほどの緊張感。思考の回転は酔っ払いの呂律なみの速さで、物事良く考えなさいと言った誰かのアドバイスはとくに消え去ってしまい…もうF1のレーシングカーよりしく凄まじい速さで吹っ飛んでいく。ついでに頭に出てきた新しい事柄も同じように吹っ飛んでいく。人間は遙か太古の原人から知的生命体の頂点に陣を敷き、もっとも高度な文化を持ち理性と規律を重んじて本能とは別ベクトルで物事を考えられるようになった。そう、人間とは最強の群である。

要約しよう。極度の緊張でパニックに陥ってる。俺の思考回路はマックスハートズッキュンだ。これもパニックで出たのだろう。

朝起きたら布団が汗でぬれていた。なんだ夢か。そうりやそうだ、あんな夜空は夜空じゃない訳で、俺も男子高校生特有の恋愛したい願望が夢となって表れたのだろう。納得。

「どうしたんだ小鷹？」

そんなことなかった。現実でした。
と言っのも……

あれから夜空を家に招いて、小鳩に「今日はうんこシスターじゃなくて夜空が遊びに来たのか？クククツ…良いだろう下等な人間を歓迎してやる。好きに計らうがよいぞ下等な人間」と

言った後に「あんちゃん、今日のごはんなに？」と聞かれて思い出した。そういえばもう結構な時間なのに俺たちは飯も食わずに歩き回ったりしていた。

俺は小鳩に会えて現実感が出たのか緊張の糸が切れたのかお腹の虫がなつてしまい、ついでに隣の夜空もお腹が減っている様だったので「夜空も食べるか？」と聞いたところ頷いたのでご飯を作ることにした。

夜空が来ているとはいえ、特に豪華な夕飯が出来る準備などしていなかったからパスタに毛が生えたような物とサラダ位だったが、普段は小鳩と二人での食事なので、会話もある程度決まった内容なのだが、夜空が居ると言うのが新鮮で結構楽しかった。

というかこいつ等仲良かったっけ？ 位に小鳩と夜空の仲は良好だった。大概是夜空の小鳩いじりだったが。

夕飯後は、俺が洗い物をする時、二人がゲームやり始めたので（当たり前のように夜空がボコボコにされてムキになっていた）それを鑑賞しながら楽しんでいた。時々小鳩が「復讐じゃ」と呟いていたのは聞かなかったことにした。夕飯でイジられた事を根に持っていたのか？

そんなこんなで三人で遊んでたら、気付けばもう11時だった。そんな時間に夜空を外に出すわけにもいけないので「泊まってけよ」と言ったら「いいのか？」なんて言っていたが、マリアもケイトも家に泊まった事もあるので、特に俺と小鳩は抵抗感も無かった。夜空も「人の家にお泊りなんてリア充みたいだな」と満面の笑みを浮かべていた。

明日は学校なので、もう風呂入って早く寝なきやなと思い、夜空に「小鳩を風呂に入れてくれ」と頼み、夜空の寝間着が無い事に気付き（マリアの様に小鳩のパジャマを着せるわけにもいかないし）、風呂場の前から「俺のでもいいか？」と聞いたたら了承してくれたので俺の寝間着を脱衣所に置いておいた。夜空が脱いだ服とかは見ないようにした。うん、見てないよホントに。

それで俺はコーヒーを居れてリビングでくつろいでいた。風呂場からキャッキヤと聞こえてくる声が心地いいのでなんだか「幸せだな」なんてクサイセリフを呟いていた。

……なんだこれ？

落ちつて初めて気付いた事。夜空はマリアでは無い。夜空と昨日今日と遊んで色々あった末に此処にいてこんな状況になってしまった事を思い出してしまった。団欒という魔力に魅入られて居たことを感じた。

そんな訳で、一人でコーヒーなんて飲んで落ち着いてる場合じゃなかったが、どうせ夢落ちだろうとタカを括ろうとした所で夜空に「どうしたんだ小鷹？」と話しかけられた所で現実に引き戻された。振り向いて夜空を見てみると俺のＴシャツとズボンを着用してたのだが、上も下も少しブルブルで何とも言えぬ。何とも言えぬ！

「ボーイッシュだな夜空」

「それを言うか！？ そりゃ本物の男の服なのだからそうだろう」
そういつて夜空はＴシャツの肩の部分を少し摘まんでハジき、「似合うか？」と聞いてきた。

「似合うというか……。俺のだからなあ、変じゃないぞ」

やるじゃんって言いたかったが地雷っぽいからやめた。だって元々中性的な夜空が男の格好してて、でも出るところは出てたりで、もうたまりませんけどね。

そんなやり合いをしてたら小鳩も出てきて「クククツ」男への変化とはやるではないか……」と言って夜空が反撃しているのを後目にそくさと風呂に逃げ込んだ。

湯船につかって体を触ると大分体が疲れて居ることが分かった。や

つぱり人間は緊張するだけで疲れるんだな」とマッサージをやり始めて気が付いた。風呂に長く居たら夜空が先に寝るんじゃないかと俺もこんなに疲れてるんだからあいつも相当溜まっているはず。ふふ…逃げ切りか。そして体のマッサージを続ける事5分。

「小鳩は寝たぞ。人の家で一人は居心地が悪いから早く出てきてくれ。」

「…おー」

催促されちゃった。って言う訳で、俺は観念して洗う所を洗ってから出ることにした。

「上がったか」

「お前が早めに上がれて…。おい」

夜空は居心地が悪いと言っていた割に、勝手にお湯を沸かしてコーヒーなんぞを飲んでいた。夜空はとぼけた様な顔をして、「小鷹の分だ」ともう一つカップを用意してくれた。

「よくコーヒーの場所が分かったな」

「雰囲気わかるだろう。勝手に色々見たが気にするな」

「気にするわ！　つかコーヒー苦ッ！」

「ん、人を家に上げると軽い家探しが始まると聞いたが違うのか？」

「ずいぶん尖がった意見！？」

でも確かにそんなイメージはある。家に人を上げるとは、そういう事を含めても上げて良いって思った人しか皆上げてないのか？なるほど、友達の特権か。

「夜空って濃いコーヒーが好きなのか？」

「普段はアメリカンだがな。アメリカンはエスプレッソにお湯を加えるだけだからいつも最初は濃く入れるんだ」

そういえば外国のカフェではアメリカンコーヒーを頼むとエスプレッソにお湯を入れて出されるというのは聞いたことがある。

「なるほど」

「なかなか頭がいいだろ。今日は加える分のお湯を作り忘れただけ

だが」

「ミスじゃねえか!!」

「気にするな、上手く作れたと思うが」

確かに味は良いのでそれ以上文句を言うのはやめにした。

「コーヒーが上手く入れられる前に料理上手くなれよ」

「あ”あ”」

「ごめんなさい」

地雷でした。

「だがな、私だって努力していない訳ではないぞ。一応作れるのだ、味もそこそこ食べられるはずだ」

「え、夜空料理できないって言ってただろ」

いつかの合宿やら鍋の時も「料理などできるわけないだろう」と洗い物さえ拒否してたのに。

「私を書いた絵を見たことあるだろ」

「あのアソパソマソ風おにぎり君か」

「ああ。何の因果か知らないが、私が作るものは大概と云っていいほど見た目が悪くなる。私の料理を見たら驚くぞ、ヘドロみたいで」

「それは…」

なるべく拝みたくない。というかイメージもあんまりわかない。

「テレビだったらモザイクが掛るほどだ。だから食べたければ作ってやるが、多分食欲をそがれるぞ」

「そんなにか」

「味は大丈夫だがな」

怖いもの見たさで一回見てみたい様な気もするけど…

「料理教えてやろうか？」

「……いいのか？」

屈辱だとかなんとか呟いていたが、夜空に対してアドバンテージがあまり無い俺はちよつと得意げだった。夜空は俺のカップが空になりそうになる度、俺にコーヒーを入れた。コーヒーマーカーの中が空になるまで。

明日は学校だしそろそろ寝るか。

「あ、夜空の寝場所を考えてなかった」

さすがにソファで寝かせるのも悪い気がする。

「小鷹のベッドに決まってるだろう」

まあ：小鳩はもう寝てるし、こいつが一緒のベッドに入るときに起こすのは悪いしなあ。俺がソファでねるか。

「わかった。俺の部屋はあっちだから。勝手に部屋を漁るなよ」

そういつて俺は自分の掛布団を用意しに押し入れに向かおうとした時

「小鷹もに決まってるだろう」

と悪戯な笑みを浮かべている夜空を見た。

ですよね！。

4 話（後書き）

読んで頂いた方々ありがとうございます。

この話はすぐに終わって次は理科の書こうつて思ってたんですが、自分でも長くなって驚いてます。

できるだけ綺麗な終わり方を目指したいのもう少し頑張らせていただきます。

失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0058ba/>

「嫌な事は出来るだけ見ないように」

2012年1月10日17時00分発行